

デンマーク語従属節語順の変化と言語接触について

—中世低地ドイツ語コーパスの調査を通じて—

大西貴也

takayanhyk@gmail.com

キーワード: デンマーク語 中世低地ドイツ語 歴史統語論 コーパス 言語接触

要旨

現代デンマーク語の従属節では定動詞の繰り上げが起こらないが、中世から近世初期のデンマーク語では繰り上げが起こっていた。定動詞の繰り上げは、16世紀から徐々に減少していった。他方、中世デンマーク語はハンザ同盟経済圏での共通語であった中世低地ドイツ語との深い言語接触を経験していることが分かっている。本稿ではコーパス調査を通じて、デンマーク語の従属節語順の変化に影響を与えた可能性のある中世低地ドイツ語の用例が実際に存在したことを示す。また、両言語の話者の接触に関する社会的状況について考察した上で、Van Coetsem (1988) のモデルを参考にしつつ、デンマーク語の従属節における語順の変化が、統語的借用と既存の表現の再分析に起因する可能性を提示する。

1. はじめに

現代デンマーク語の従属節においては、節全体を作用域とする副詞や、否定を表す *ikke* ‘not’ などの語句が現れる場合、それが定動詞に対して前置される (Allan et al., 2000: 167)。¹このとき、定動詞第3位の語順を示す。これは、定動詞第2位語順 (以下、V2 語順) を呈する主節とは異なる語順である。従属節の語順が主節と変わらない現代英語 (1) や、従属節末尾に定動詞を置く現代ドイツ語 (2) と比べると、それらの代表的なゲルマン語とは異なる従属節語順 (3) であり、デンマーク語を含む大陸スカンディナヴィア諸語 (ノルウェー語、スウェーデン語) に特徴的な語順であると言える。

(1) 英語

...that John *had* probably bought the book. (Platzack, 1986: 186)

(2) ドイツ語

...dass John wahrscheinlich das Buch gekauft *hatte*. (Platzack, 1986: 186)
that John probably the book buy.PP have.PST

¹ 副詞がない場合、定動詞は主語の後に置かれ、表面上、主節と同様の定動詞第2位語順を示す。

(3) 現代デンマーク語

...at John ofte/ikke/faktisk spiste fisk. (Jensen, 2001: 117)
that John often/not/actually eat.PST fish

一方、14 世紀以前のデンマーク語文献に見られる従属節では副詞や否定辞が定動詞の後ろに置かれ、主節と同様に V2 語順が一般的だった。

(4) at han ma æi kummæ
that he can not come

「彼が来られないということ」(*Jyske Lov*; NKS295, 8vo: 22v)

生成文法の枠組みでは、現代デンマーク語に見られる (3) のような [副詞一定動詞] の語順は、従属節において定動詞が移動せず、VP 内にとどまっていることを反映していると分析される (Jensen, 2001: 117)。それに対し、中世デンマーク語における (4) のような語順は、VP の主要部 V から TP の主要部 T (時制辞) への定動詞の移動が起こっていると分析される。したがって、デンマーク語の歴史においては、従属節における V から T への定動詞の繰り上げ (verb raising, 以下 VR とする) が消失するという形で文法が変化したと言える (cf. Platzack, 1988; Sundquist, 2003)。

このようなデンマーク語の従属節語順の変化が起こりつつあった中世以降の時期は、商業的な都市同盟であるハンザ同盟が力を持ち、北海からバルト海にかけて影響力を持っていた。ハンザ商人が活動していた地域においては、中世低地ドイツ語が交易のための国際語として機能していた (Peters, 2000)。また、1369 年以降、ハンザ総会の決議録はラテン語に代わって低地ドイツ語で記されるようになったことが分かっている (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016: 278)。すなわち、低地ドイツ語は少なくとも文書語としては 14 世紀後半以降その影響力を強めていったことが見て取れる。

当該時期において、スカンディナヴィア諸語と低地ドイツ語との接触があったことはよく知られている。中でも、語彙の借用に関しては豊富な先行研究がある。借用された語彙としては、例えば貿易に関する語彙や、*be-*, *ent-*, *er-*, *ge-* などのスカンディナヴィア諸語では失われていた、強勢を持たない動詞の接頭辞が借用されたことが分かっている (Haugen, 1976: 220-221)。言語接触の影響が現れるのは、語彙の側面だけに限られるものではない。統語論の変化も、言語接触の結果として現れうるものである。

1500 年から 1700 年のデンマーク語文献の従属節語順を調査した Sundquist (2003) によれば、当該時期には (4) のような古い語順と (3) のような新しい語順とが共存しつつも、時代を下るにつれて、新しい語順を呈する節の割合が増えていることが分かる。1500 年にはすでに両者の語順が共存していたことから、それより早い時期から語順の変化が始まっていたと考えられる。したがって、当該の語順変化が言語接触に起因する可能性がある。

ゲルマン語の歴史統語論に関しては、生成文法の観点から内的な文法変化について論じ

た研究は多くある一方で、言語接触による変化について分析した研究は比較的少ない。そこで、本論文では中世低地ドイツ語との接触が中世デンマーク語の従属節語順の変化に影響を与えた可能性と言語接触による語順の変化のメカニズムについて考察する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節で調査の概要を述べ、第3節で調査結果を示す。第4節では中世デンマーク語と中世低地ドイツ語の言語接触の状況と、実際の言語変化のメカニズムについて考察を加える。第5節は結論である。

2. 調査について

本調査では、“Referenzkorpus Mittelniederdeutsch/Niederrheinisch (1200-1650).” (以下、ReN コーパス) を使用した。調査対象としたのは、デンマークに地理的に近い地域で話されていた、リューベック方言・北低地ザクセン方言・東エルベ方言の3方言の資料である。とりわけ、リューベックはハンザ同盟の中でも中心的な役割を占めており、その方言は文書語として標準語の地位を確立した。低地ザクセン方言は、西はゾイデル海 (現在のオランダ北西部にかつて存在した湾であり、位置は現在のエイセル湖に相当)、北はスリスヴィまで広がっており、植民の結果としてバルト海都市、一時的にポーランド、デンマーク、スウェーデンの都市にも根付いていた (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016)。

そして、それらの方言資料のうち、節全体を作用域に取る否定表現 (否定の小辞 *en/ne*, *nicht* ‘not’, *nicht meer* ‘not anymore’ 等) を含む従属節を抽出し、文頭付近の語順に注目して調査した。第1節で述べたように、従属節において定動詞の移動が起こっているか否かの判断の証拠になるのは否定の意味を含む副詞句だけではないが、本論文では否定辞に絞って調査を行なった。

und ‘and’, *men* ‘but’ で始まる節も検索対象になっていたが、これらは等位接続詞としての用法が一般的であるため今回は除外した。また、中世低地ドイツ語では否定の小辞 *en/ne* と否定の副詞 *nicht* が同一の節内で用いられる、多重否定の用法が見られる (Breitbarth, 2014)。同一の節が二重に表示された場合、片方を除外した。

3. 調査結果

以下、地域・時代別に調査結果を示す。表1~3は、節全体を作用域に取る否定表現を含む従属節について、節先頭付近、すなわち、補文標識直後の語順がどのようになっているかを調べ、その例の出現数を計数したものである。Neg は否定的要素、Pron は代名詞類、Adv は副詞、PP は前置詞、other はその他の要素を表す。例えば、[S-Neg] の場合、節先頭において「主語 - 否定的要素」の語順が見られるということである。

表 1 リューベック方言

	S-Neg	S-Pron	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1251-1300	1 (20%)	3 (60%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	5 (100%)
1401-1500	209 (40%)	73 (14%)	44 (8%)	30 (6%)	91 (17%)	75 (14%)	522 (100%)
1501-1550	17 (47%)	3 (8%)	2 (6%)	0 (0%)	8 (22%)	6 (17%)	36 (100%)

表 2 北低地ザクセン方言

	S-Neg	S-Pron	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1251-1300	7 (24%)	7 (24%)	1 (3%)	3 (10%)	9 (31%)	2 (7%)	29 (100%)
1301-1400	55 (21%)	59 (23%)	7 (3%)	43 (17%)	70 (27%)	26 (10%)	260 (100%)
1401-1500	82 (46%)	18 (10%)	11 (6%)	14 (8%)	21 (12%)	31 (18%)	177 (100%)
1501-1600	38 (22%)	48 (28%)	10 (6%)	8 (5%)	37 (21%)	33 (19%)	174 (100%)
1601-1650	5 (17%)	6 (20%)	5 (17%)	1 (3%)	4 (13%)	9 (30%)	30 (100%)

表 3 東エルベ方言

	S-Neg	S-Pron	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1301-1400	4 (45%)	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (33%)	1 (11%)	9 (100%)
1401-1500	11 (13%)	30 (35%)	8 (9%)	1 (1%)	14 (16%)	22 (26%)	86 (100%)
1501-1600	27 (28%)	9 (9%)	9 (9%)	11 (11%)	19 (20%)	22 (23%)	97 (100%)
1601-1650	27 (51%)	4 (8%)	4 (8%)	1 (2%)	4 (8%)	13 (25%)	53 (100%)

また、従属節内で V2 語順になっている例も計数した。以下では、方言と時代ごとに計数結果を示している。Lb はリューベック方言、Nns は北低地ザクセン方言、Oe は東エルベ方言をそれぞれ示す。空欄になっている箇所は、分析対象となる資料がなかったところである。

表 4 V2 語順を示す従属節の数

	1251-1300	1301-1400	1401-1500	1501-1600	1601-1650	total
Lb	0		23 (4%)	0		563 (100%)
Nns	0	2 (0.3%)	0	1 (0.1%)	0	670 (100%)
Oe		0	0	1 (0.4%)	0	245 (100%)

また、定動詞の前に否定の小辞 *en/ne* が置かれていて、節の 3 番目に定動詞が現れる節の数も以下に示しておく。ここではその分析に深く立ち入らないが、*en/ne* が接語であるとすればこの語順も V2 語順であると分析しうる。

表 5 節先頭の語順が [何らかの要素-ne/en-V] である従属節の数

	1251-1300	1301-1400	1401-1500	1501-1600	1601-1650	total
Lb	2 (0.4%)		21 (3.7%)	0		563 (100%)
Nns	0	9 (1.3%)	44 (6.6%)	0	0	670 (100%)
Oe		0	0	0	0	245 (100%)

[S-Neg] かつ非 V2 語順の例文と、[S-Pron] かつ非 V2 語順の例文、[S-V]、[S-en/ne-V] の例文を示す。

(5) [S-Neg]

dat he nicht tu-ghet ne hadde
that he not evidence.PP PTC have.PST

「彼が証言しなかった (こと)」

(北低地ザクセン方言; 1301-1350; *Brem._StR_1303,04_Abschrift*)

(6) [S-Pron]

dat me yd nicht seen mochte
that people it not see could

「それが見えなかった (こと)」

(リューベック方言; 1451-1500; *Lüb._Passional_1488*)

(7) [S-V]

wente gy wetten nicht de stunde noch den dach
because you know.PRS not the time and the day

「あなた方はその時も日も知らないのだから」

(リューベック方言; 1451-1500; *Lüb._Dod._Dantz_1489*)

(8) [S-en/ne-V]

Wen=te ik ne hebbe nenen man
because I PTC have.PRS no man

「なぜなら私には夫がないから」

(北低地ザクセン方言; 1451-1500; *Buxteh._Ev.*)

以上の結果からは、まず [S-Neg] の語順の頻度が高いことが分かる。定動詞の位置に関して言えば、V2 語順を示す従属節は少ないことが分かる。これは、否定表現の後に定動詞を置く現代デンマーク語の従属節語順と類似した語順の傾向であり、定動詞が節の 2 番目に置かれる中世デンマーク語の従属節語順とは異なっていると言える。したがって、この従

属節に見られる各要素の順序が現代デンマーク語の従属節語順の成立に寄与している可能性が考えられる。一方で、[S-Pron] の割合も比較的多いと言える。一因としては、指示対象が既知の要素が節の前の方に置かれるということが考えられる。デンマーク語においては、中世の時期に格の合流が進行していた (Haugen, 1976: 290) が、それまでは格の区別が残っていて、屈折が豊富な古典印欧語と同様に、名詞句の位置に関する自由度はより高かったと推測できる。したがって、代名詞の位置についてはあまり影響を受けなかったと考えられる。

4. 考察

本節では、中世におけるデンマーク語と低地ドイツ語との言語接触の状況を踏まえつつ、前節で提示した調査結果をもとに考察を加える。

4.1. Van Coetsem (1988) のモデル

Van Coetsem (1988) は、言語接触によって起こる言語的特徴の転移 (transfer) を 2 種類に分類する。受け渡される特徴を持った source language (供給言語, 以下 SL) から、特徴を受け取る recipient language (受容言語, 以下 RL) へと転移は起こる。

以下では、第二言語を大人になってから獲得するという二言語使用の場合について考える。その話者の知っている二つの言語 (母語と第二言語) の中で RL が優位に立っている (dominant) 場合、すなわち、RL の知識のほうが SL の知識より多いような場合、RL agentivity が働き、SL の特徴をそのまま RL に取り入れる。これは借用 (borrowing) である。一方、SL の方が優位である場合、SL agentivity が働く。この場合、SL の特徴が RL に課されることになる。これは、Van Coetsem の用語で押し付け (imposition) と呼ばれている。

Lucas (2012) にしたがって、第二言語ではなく母語を常に優位な言語とすると、以下のような図式になる。

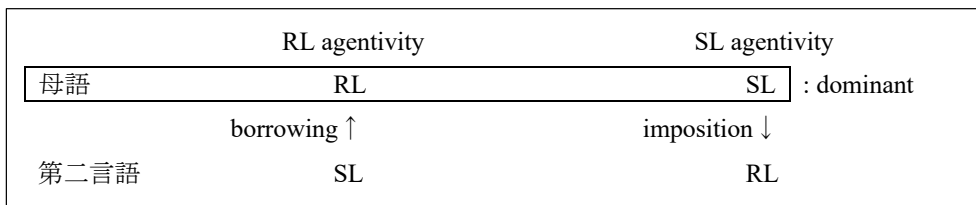


図 1 Van Coetsem (1988) のモデルの図式化

4.2. 社会言語学的状況

中世低地ドイツ語はハンザ商人の活動地域において、交易のための国際語として機能していた (Peters, 2000)。すなわち、中世の北海からバルト海沿岸の地域では、交易の際さかんに低地ドイツ語が用いられていた。

13 世紀から 14 世紀にかけて、デンマークにはスウェーデン以上に強力にドイツ人の入植が進められ、スリスヴィ (シュレースヴィヒ) やコペンハーゲンではドイツ人の存在が目立

っていた (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016)。コペンハーゲンなどのデンマークの都市にはハンザ支所があった (同書) ことから、デンマーク語話者の居住地域でも低地ドイツ語を話すハンザ商人の往来があったことが推測できる。このように、デンマーク語使用地域においては、北ドイツのハンザ商人との交流によって低地ドイツ語との接触が促されたと見られる。

言語接触によって引き起こされる言語変化の程度は、その接触の激しさと関連している。Thomason and Kaufman (1988:74-75) の提示する借用のスケールは、接触の激しさによって5段階に分けられている。中世デンマーク語と中世低地ドイツ語との接触においては、語彙の面を見ると *men* ‘but’ や *hvis* ‘if’ といった接続詞が低地ドイツ語からデンマーク語に借用されていることから、本スケールの第2レベル (“Slightly more intense contact”) に位置づけることができる。ただし、同じゲルマン語に属するゆえに類似点も少なくない両言語の接触であるため、密接な接触にもかかわらず大きな変化が起こらなかった可能性もある。したがって、接触の程度としては少なくとも第2レベルの “Slightly more intense contact”、あるいは、それを超えるレベルのものであったと考えることができる。

4.3. 語順の借用

言語接触に起因する言語変化に寄与した可能性として、不完全な言語獲得 (imperfect learning) が考えられる。語族が異なり相違が大きい言語どうしの接触に関して、不完全な言語獲得が起こりうる。そして、それが原因となり、基層言語の特徴が上層言語に取り込まれることで、上層言語の音韻体系の変化や統語法の変化が起こることがある。例えば、Thomason and Kaufman (1988: 39) は、Emeneau (1964: 644) を引きつつ、サンスクリットにおける反舌音やドラヴィダ語的特徴の起源を、ドラヴィダ語話者によるインド・アーリヤ語の不完全な習得と、それに伴う母語の特徴の干渉から説明している。ドラヴィダ語的特徴を持ったインド・アーリヤ語を使用する話者は移住者であるインド・アーリヤ人に影響を与えるほど多く、言語交替を経て、それがインド語に変化をもたらしたと述べられている。

中世低地ドイツ語と中世デンマーク語について考えてみると、両言語はお互い同じゲルマン語派に属し、類似度が高かったと見られる。この場合、相違が大きい言語どうしの接触とは異なり、相手の使う言語を知らない状態でも、ある程度相互理解ができた可能性がある (Braunmüller, 2006; 2007)。このような現象は受容的多言語使用 (receptive multilingualism)² と呼ばれる。受容的多言語使用が成立していた場合、相手の言語を隅々まで学び取る必要はなく、話者は自分たちの使いやすい形で相手の言語を部分的に学び取って使用することになる。すなわち、母語をそのまま用いたとしても相手との意思疎通に支障をきたさない部分においては、それが相手の言語と異なるとしても、そのまま母語の特徴を使用することになる。

² 現代の大陸スカンディナヴィア諸語、すなわち、デンマーク語・スウェーデン語・ノルウェー語の話者の間で、それぞれの母語を用いて会話をしても、ある程度の相互理解が可能であることと同様の現象であると考えられる (cf. Braunmüller, 2002)。

このとき、不完全な言語獲得が促進されると考えられる。このように、接触する言語どうしの類似度が低い場合に比べ、部分的に母語の知識を用いてコミュニケーションを取ることができるほど類似度が高ければ、細かい相違点は捨象されて、より不完全な言語獲得が行われる可能性が高くなる。

Braunmüller (2006) が低地ドイツ語話者によるスカンディナヴィア諸語の不完全な言語獲得があったと述べているように、デンマーク語と低地ドイツ語の接触においても、低地ドイツ語話者によって受容的多言語使用を伴う不完全な言語獲得が行われたと考えられる。上述のように、低地ドイツ語話者は大規模にデンマークへ移り住んできており、低地ドイツ語母語話者が話すデンマーク語に触れる機会も多かったと見られる。その際、デンマーク語母語話者は低地ドイツ語話者の用いる、母語と異なる用法に触れる機会も多く、それによって統語的借用が行われ、新しい語順が使われるようになった可能性が考えられる。なお、低地ドイツ語話者はスカンディナヴィアの侵略や領有をしていたわけではなく (Haugen, 1976: 314)、言語交替は起こっていないと見られる。一方で、上層言語である低地ドイツ語の話者による不完全な習得と特徴の押し付けによって、基層言語であるデンマーク語の特徴が変化したという可能性は考えにくい。

統語的借用 (syntactic borrowing) は珍しいものではない。例えば、Thomason and Kaufman (1988: 81-82) は、Bender (1980) を引き、アメリカのネブラスカに住む移民が話す低地ドイツ語の例を挙げている。英語からの統語的借用によって、標準的なドイツ語であれば節の末尾に置かれる過去分詞や動詞の分離可能な接頭辞が、時折節の内部に置かれる。また、定動詞第2位規則が働かないこともあるという。Lucas (2012) もイディッシュ語とベルベル語における統語的借用の例を挙げているように、統語論の側面でも RL agentivity を通じた言語的特徴の転移、すなわち、借用が起こりうると言える。Lucas (2012: 280) が、 “[T]he key factor determining the type of knowledge of the L2 that the learner acquires must be the nature and quantity of data that she is exposed to.”³ と述べるように、統語論的借用が起こる際には、実際にその語順の用例に出会う頻度が高いことが期待される。また、中世から近世初期にかけてのデンマーク語のテキストでは、従属節における V2 語順が非常に多かった (Braunmüller, 2006)。したがって、第3節で見たように、低地ドイツ語の従属節における否定辞は、それまでのデンマーク語では一般的ではないような位置に頻繁に現れていたと考えられる。デンマーク語話者は、デンマークで活動していた非常に多くの低地ドイツ語話者と接触し、また、第3節で示したように、否定表現を含む節において高い頻度で現れる、副詞が定動詞に先行する語順を、RL agentivity によって借用したと考えられる。

なお、前節で言及した Thomason and Kaufman (1988: 74-75) の借用のスケールでは、構造上の借用の程度についても言及されている。第2レベルで起こる構造上の借用としては「ほとんど類型論上の混乱を引き起こさない新しい機能 (もしくは機能的制限) と新しい配列に限定される」(Thomason and Kaufman, 1988: 74) とされている。定動詞と副詞の位置関係

³ 引用文中の she は a speaker (話者) を指す。

は、それが変化しても大きく意味や機能を変えないと考えられることから、これが統語的借用だとすれば、語彙の面だけでなく構造上の借用の面でも第 2 レベルに位置づけることが可能であろう。

4.4. 再分析による統語変化の可能性について

新しい語順の定着を後押ししたと考えられるデンマーク語本来の用例として、中世デンマーク語の文体的前置 (*stylistic fronting*) が起こった主格関係代名詞節が挙げられる。文体的前置とは、主格関係代名詞節や非人称の文のように、主語位置が空白である場合、その位置に節内の後方に置かれる要素が前方へ移動する現象である (Holmberg, 2017)。主格関係代名詞節の例は以下の通りである。

(9) *vatn hvært, ær æi ær mæp damme fæst*

water every which not is with dam closed

「ダムによってせき止められていない全ての水」 (*Skånske Lov; Falk and Torp, 1900: 296*)

(9) のように、主格関係代名詞節においては、関係節を導入する関係代名詞の直後に主語が置かれず、その位置が空白となる。そして、その位置には、本来定動詞より後方に現れる要素 (ここでは否定辞) が移動していると分析される。このように、[主格関係代名詞－否定 (æi)－定動詞] と否定辞が定動詞の前に現れる語順は、この中世低地ドイツ語の語順と類似している。

Sundquist (2003) は、この語順を構造上の曖昧性を持つ表現であると述べている。すなわち、副詞と定動詞の位置関係について、表面上、定動詞の V から T への移動と文体的前置がともに起こった語順であるという解釈と、定動詞の移動が起こっておらず、元の位置 (*in situ*) にあるという解釈とが、両方とも可能である。デンマーク語の従属節における語順の変化は、従属節における文法規則が変化したためであり、その内的な変化として、構造の曖昧性に伴う再分析が起こった可能性は十分に考えられる。そして、この再分析の契機となったのが中世低地ドイツ語からの従属節における語順、とりわけ、否定辞や副詞の位置の借用ということになる。

したがって、低地ドイツ語の従属節に頻出する [補文標識－主語－否定－(その他要素)－定動詞] という語順の影響により、デンマーク語話者は、節全体を作用域とする否定表現を節のより左側、すなわち定動詞より前に置く語順を許容したと考えられる。副詞の位置は、定動詞や項の位置などに比べると、位置が変わっても意味が通じることが期待されやすく、比較的周縁的な要素であると考えられる。実際、1500 年以降は定動詞の繰り上げがある語順とない語順の例が混在しており (Sundquist, 2003)、両者の語順はともに許容されていた。このうち、新たな語順が許容される土台となりえたのは、中世デンマーク語にも元々存在した類似の語順の従属節である。そしてこの語順を、デンマーク語を母語として獲得する次の世代の者たち (子供たち) が「従属節では定動詞の移動が起こらない」と、定動詞に関する

語順の規則として再分析することで、定動詞の移動に関するパラメータの値が変化し、規則が変化したと結論付けられる。

以上のように、中世デンマーク語における従属節の語順の変化は、中世低地ドイツ語との接触に起因すると考えられ、借用と再分析の観点から説明できる。

5. 結論

本論文では、中世デンマーク語の従属節語順の変化の要因を中世低地ドイツ語との接触に求められるかどうかについて、中世低地ドイツ語のコーパスを用いて、否定の語句を含む従属節の語順を調査した。調査結果によれば、補文標識直後、つまり節先頭では [主語－否定] という語順の用例が多く見られることが分かり、これは現代デンマーク語の従属節語順につながる変化をもたらした用例であると考えられる。

中世には、北海からバルト海沿岸にかけてハンザ同盟が影響力を持っており、低地ドイツ語を母語とするハンザ商人はデンマークにも大規模に移住していた。ハンザ商人の母語である低地ドイツ語は、系統関係の近さゆえにデンマーク語と類似点が多く、受容的多言語使用によってお互い母語を使いながらも意思疎通を図ることができたと考えられる。

デンマーク語における語順変化の要因として、統語的借用と再分析が挙げられる。デンマーク語話者は、母語と異なる従属節の語順を *recipient language agentivity* によって借用した。また、文体的前置によって副詞が定動詞に先行する語順が中世デンマーク語において元々存在したことで、定動詞の移動の有無に関する規則に再分析が起こり、当該の統語変化に寄与したと結論付けられる。

略号一覧

PP: 過去分詞形 PRS: 現在形 PST: 過去形 PTC: 小辞

参考文献

【使用したコーパス】

「ReN コーパス」:

ReN-Team. 2019. “Referenzkorpus Mittelniederdeutsch/Niederrheinisch (1200-1650).” Archived in Hamburger Zentrum für Sprachkorpora. Version 1.0. Publication date 2019-08-14. <http://hdl.handle.net/11022/0000-0007-D829-8>.

本コーパスのうち、Lübisch (リユーベック方言), Nordniedersächsisch (北低地ザクセン方言), Ostelbisch (東エルベ方言) の資料を調査対象とした。

本文中の例文の出典として示した資料名の略称と名称の対応は以下の通り。これらの資料は ReN コーパスに収録されているものである。

Brem._StR_1303,04_Abschrift: Bremer Stadtrecht, 1303/04, Abschrift

Buxteh._Ev.: Qvatuor Evangeliorum versio Saxonica, 2. H. 15. Jh.

Lüb._Dod._Dantz_1489: Des dodes dantz, Lübeck: Mohnkopf, 1489

Lüb. _Passional_ 1488: Jacobus de Voragine: *Passional*, Lübeck: Steffen Arndes 1488

【二次文献】

- Allan, Robin, Philip Holmes and Tom Lundskaer-Nielsen (2000). *Danish: An Essential Grammar*. New York: Routledge.
- Bender, Jan E. (1980). The impact of English on a Low German dialect in Nebraska. In: Paul Schach (ed.), *Languages in conflict: linguistic acculturation on the Great Plains*. Lincoln: University of Nebraska Press, 77-85.
- Braunmüller, Kurt (2002). Semicommunication and accommodation: Observations from the linguistic situation in Scandinavia. *International journal of applied linguistics*, 12(1), 1-23.
- Braunmüller, Kurt (2006). Wortstellung und Sprachkontakt: Untersuchungen zum Vorfeld und Nebensatz im älteren Dänischen und Schwedischen. *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik*, 62 (1), 207-241. Amsterdam: Rodopi.
- Braunmüller, Kurt (2007). Receptive multilingualism in Northern Europe in the Middle Ages. In: Jan D. ten Thije and Ludger Zeevaert (eds.), *Receptive multilingualism: Linguistic analyses, language policies and didactic concepts*, 6, 25-47. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Breitbarth, Anne (2014). Dialect contact and the speed of Jespersen's cycle in Middle Low German. *Taal en tongval*, 66 (1), 1-20. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Dollinger, Philippe (1964). *La Hanse: XIIe-XVIIe siècles*. Paris: Édition Aubier. (ドラランジェ, P. 高橋理 (監訳). 奥村優子・小澤実・小野寺利行・柏倉知秀・高橋陽子・谷澤毅 (共訳) (2016). *ハンザ: 12-17 世紀*. 東京: みすず書房)
- Emeneau, Murray B. (1964/1956). India as a linguistic area. In: Dell Hymes (ed.), *Language in culture and society*. New York: Harper & Row, 642-653. Reprinted from *Language* 32: 3-16.
- Falk, Hjalmar and Alf Torp (1900). *Dansk-norskens Syntax*. Kristiana: Aschehoug.
- Jensen, Britta (2001). On sentential negation in the Mainland Scandinavian languages. In: Maria Liakata, Britta Jensen and Didier Maillat (eds.) *Oxford University Working Papers in Linguistics, Philology and Phonetics*, 6, 115-137. Available online at: <https://www.ling-phil.ox.ac.uk/files/owp2001.pdf>
- Haugen, Einer (1976). *The Scandinavian Languages: An Introduction to Their History*. London: Faber and Faber.
- Holmberg, Anders (2017). Stylistic Fronting. In: Martin Everaert and C. Van Riemsdijk (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*. Second Edition.
- Lucas, Christopher (2012). Contact-induced grammatical change: Towards an explicit account. *Diachronica*. 29: 3, 275-300. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Peters, Robert (2000). Die Diagliederung des Mittelniederdeutschen. In: Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann & Stefan Sonderegger (eds.), *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur*

- Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 1478-1490.
- Platzack, Christer (1986). COMP, INFL, and Germanic word order. In: Lars Hellan and Kirsti Koch Christensen (eds.), *Topics in Scandinavian Syntax*. 185-234. Dordrecht: Springer.
- Platzack, Christer (1988). The emergence of a word order difference in Scandinavian subordinate clauses. In: Denise Fekete & Zofia Laubits (eds.), *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*. 215-238. Montreal: Department of Linguistics, McGill University.
- Sundquist, John D. (2003). The Rich Agreement Hypothesis and Early Modern Danish embedded-clause word order. *Nordic Journal of Linguistics*. 26.2, 233-258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Coetsem, Frans (1988). *Loan Phonology and the Two Transfer Types in Language Contact*. Dordrecht: Foris.

Word Order Change in Danish Subordinate Clauses and Language Contact with Middle Low German

ONISHI Takaya
takayanhyk@gmail.com

Keywords: Danish, Middle Low German, historical syntax, corpus, language contact

Abstract

In the subordinate clauses of modern Danish, the finite verb does not move from V (the head of VP) to higher T (the head of TP), while it did in the Danish between the medieval and early modern periods. The frequency of the movement gradually declined from the 16th century. It is also well known that Middle Danish experienced close contact with Middle Low German, which was a lingua franca around the area where the Hanseatic League had strong economic influence.

This paper investigates the position of the negative elements in Middle Low German subordinate clauses via a corpus research and shows that there were abundant usages in Middle Low German that might have influenced the change of the word order of the Danish subordinate clauses. In addition, the contact between these two languages and the mechanisms of contact-induced grammatical change are discussed, using Van Coetsem's (1988) model.

The possibility that the word order change was caused by syntactic borrowing is proposed. The possibility of reanalysis is also suggested, i.e., it is possible that the syntactic change resulted from the original word order with stylistic fronting and that the word order was reanalyzed as one without finite verb movement.

(おおにし・たかや 東京大学大学院)